

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	西域の仏から東土の隠士へ：唐代維摩詰図題詩の変遷
Author(s)	查, 屏球; 渡部, 雄之
Citation	中國中世文學研究, 67 : 1 - 22
Issue Date	2016-03
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00042525
Right	
Relation	



西域の仏から東土の隠士へ——唐代維摩詰図題詩の変遷——

査屏球（日本語訳 渡部雄之）

る変化の歴史的過程について具体的に述べるものである。

一 神異の光輪…杜甫、王維から見る中唐以前の維摩詰画と詩の關係

（一）唐以前の維摩詰像の神異性と西域の特色

早期の維摩詰像には西域の仏の特色が多く見られる。例えば、西秦の建弘元年（四二〇）前後に描かれた現存最古の「維摩詰變」である甘肅省永靖県炳靈寺一六九窟の壁画の維摩詰は、頭に華蓋をいただき、額は広く鼻は高く、斜めに袈裟を懸け、左腕には打ち掛けがかり、寢台の上に半身を横たえている。また、雲岡石窟（四七一～四九四頃完成）第一窟内の維摩詰は、先の尖った異民族の帽子を被り、袖口の広い長衫を着、上には毛衣を羽織り、手で軽く仏子を持ち上げている。また、北魏太和元年（四七七）に描かれた青銅鍍金釈迦牟尼仏座像背面の図の上部左側にある維摩詰像は、手に仏子を握り、文殊菩薩と向かい合って話をしている。これらの維摩詰像の造型は、まだガンダーラ美術の影響から抜け出しておらず、人物の容貌や服装には全て胡人の特徴が見られる。

中唐以前の維摩詰像を宋代の関連する絵画と比較すると、ある面白い現象に気が付く。中唐以降、維摩詰像の神異性や西域の胡人の特徴は次第に薄れ、世俗的な要素が増していき、宋元の文人画ではもはやほとんど中国の隠士のようになっているということである。この現象が如何にして起こったかは、「維摩学」が我が国に定着する過程の中で考察するに値する問題だと言えよう。筆者は、絵画史自体（文人の水墨画における写意「中国画で細かな描写をせず、情趣の表現を重視する手法」の流行）の問題以外に、唐宋文人の詩文における自己の維摩詰化が大きく関係していると考えられる。詩人は仏を変容させて世俗の中に取り込み、自らを維摩詰になぞらえた。画家は詩人の発想によって仏画の神異的な特徴を変え、そして詩人はまた絵画に基づいて世俗的な趣を表現し、従来の仏教の偈頌の形を全て改めた。これは白居易の「香山居士図」と維摩詰像の融合に最も顕著に表れている。本稿は以上のことを中心に、関連する文献と図像資料を照らし合わせ、両者の相互的な影響關係を示すことで、かか

「」。この特徴は初唐、盛唐にもなお残っており、当時は東晋・顧愷之（三四八～四〇九）の「維摩詰図」が最も流行していた。その絵の内容については、唐人張彦遠の『歴代名画記』は「顧生首創維摩詰像、有清羸示病之容、隱几忘言之状。」（顧生首めに維摩詰像を創り、清羸示病の容、隱几忘言之状有り。）と記しており、神異的な仏教説話の要素が含まれていたことが分かる。隋末の僧侶雲宗の『京師寺記』には顧愷之の「維摩詰図」に関する記述があり、唐の睿宗の時代の人黄元之の「潤州江寧県瓦棺寺維摩詰画像碑」には同様のことがさらに生き生きと書かれている。

昔有晋莊嚴淨域。時梵侶以規模雖広、雕飾未周、永念粹華、每疚懷於須達。共成円満、而仮力於檀那。凡厥施財、莫匪鳴利。顧君乃連扣資數百、竿逾千萬、大衆貽愕、不知其然。君習氣精微、洗心閑雅。雖纓弁混俗、而績素通神。乃白緇徒、令其粉壁。於是登月殿、掩雲扉、考東漢之図、採西域之變。妙思運則冥會、能事畢則功成、神光謝而晝夜明、聖容開而道俗睹。振動世界、謂彌勒菩薩下兜率之天、照耀虚空、若多宝如来踊著闍之地。由是士女駢比、擁路争趨。車馬軒轟、傾都盛集。玉貝交獻、須臾而宝藏忽盈。青鳧乱飛、俄爾而銅山崛起。納繪帛者繼踵、施衣布者架肩、当鳴刹而雖則可驚、不崇朝而過其本數。非夫精義入神者、孰能与於此乎。……由是觀其道場妙矣、謂応供而來儀。牀枕儼然、疑

有懷於問疾。目若將視、眉如忽嘖、口無言而似言、鬢不動而疑動。豈丹青之所歎詠相好之有靈哉。頂礼者肅如在之心、瞻仰者發帰依之念。」^[2]

昔 晋の莊嚴なる淨域有り。時に梵侶 規模広しと雖も、雕飾未だ周からざるを以て、永く粹華を念ひ、毎に須達を疚、懷し、共に円満を成して、力を檀那に仮らんとす。凡そ厥の施財、刹を鳴らすに匪ざる莫し。顧君乃ち連りに扣資すること數百、竿 千万を逾え、大衆 貽愕するも、其の然るを知らず。君 習氣 精微にして、洗心 閑雅なり。纓弁 俗に混じると雖も、績素 神に通ず。乃ち緇徒に白して、其れ壁を粉せしむ。是に於いて月殿に登り、雲扉を掩ひ、東漢の図を考へ、西域の変を採る。妙思 運れば則ち冥は會し、能事 畢はれば則ち功は成り、神光謝して晝夜明るく、聖容開きて道俗睹る。世界を振動するを、彌勒菩薩 兜率の天より下ると謂ひ、虚空を照耀すること、多宝如来の著闍の地に踊るが若し。是れに由り士女 駢比し、路に擁して争ひ趨き、車馬 軒轟し、都を傾けて盛集す。玉貝 交獻せられ、須臾にして宝藏忽ち盈つ。青鳧乱れ飛び、俄爾として銅山 崛起す。繪帛を納むる者踵を継ぎ、衣布を施す者 肩を架し、刹を鳴らすに当たりて則ち驚くべしと雖も、崇朝ならずして其の本數を過ぐ。夫の精義 神に入る者に非ずんば、孰か能く此に与かんや。……是れに由り其の道場の妙なるを

観、供に応じて来儀するを謂ふ。牀枕儼然として、問疾に懐有るかと疑ふ。目は將に視んとするが若く、眉は忽ち嘖むるが如く、口は言ふこと無くして言ふに似、鬢は動かずして動くかと疑ふ。豈に丹青の相好の靈有るを歎詠する所ならんや。頂礼は如在の心を肅み、瞻仰は帰依の念を發す。

銘文にはまた、顧愷之の絵の内容が書かれている。

空牀寂寂、虚室閑閑。文殊奄至、波旬遽還。拔毛沃海、剖芥藏山。地分珠柱、天潤玉顔。

空牀寂寂として、虚室閑閑たり。文殊奄ち至り、波旬遽かに還る。毛を抜きて海に沃ぎ、芥を剖りて山に藏す。地 珠柱を分かち、天 玉顔を潤す。(其三)

智惠無辺、威靈具足。広延宝座、高蹈金粟。振動天人、津梁道俗。火宅垂蔭、幽徒炳燭。

智惠 無辺にして、威靈 具足す。広延せる宝座、高蹈せる金粟。人天を振動し、道俗を津梁す。火宅 蔭を垂れ、幽徒 燭を炳る。(其四)

於赫有晋、像教斯伝。續事□矣、靈儀在焉。神光夕照、瑞相朝円。絶如電掣、皎若星懸。

於赫たる有晋、像教斯に伝はる。續事□、靈儀在り。神光 夕照のごとく、瑞相 朝円のごとし。絶たること電の掣たるが如く、皎たること星の懸かるが

若し。(其五)

薄遊淨域、永念毘耶。香如致飯、衣似持花。嘖容示疾、啓齒降邪。室懷方丈、会想無遮。

薄か淨域に遊び、永く毘耶を念ふ。香り飯を致すが如く、衣 花を持つに似たり。嘖容 疾を示し、啓齒 邪を降す。室 方丈を懐ひ、会 無遮を想ふ。(其九)

これによると、絵の中の人物はまるで本物のように生き生きとしており、維摩詰が立て板に水を流すがごとく弁舌を振るう様子がよく伝わってくるものであったようである。また、情景は『維摩詰經』の記述に拠っており、不可思議で幻想的な世界を表現していた。空の寝台や虚室、海や山、珠で飾った琴柱、法座、出家や在家の人々等は、敦煌の壁画にもなお見られるものである。

(二) 杜甫の顧愷之「維摩詰図」に関する記憶

盛唐の文人が詩文に描く維摩詰の姿は、しばしば関連する壁画と一致し、仏教的な要素が比較的よく見られる。杜甫の何首かの詩には、こうした特徴が表れている。彼の「送許八拾遺帰江寧觀省、甫昔時嘗客遊此県、於許生処乞瓦棺寺維摩図様志諸篇末」詩に次のようにある。

看画會飢渴、追蹤恨森茫。虎頭金粟影、神妙独難忘。

画を見て曾て飢渴し、追蹤するも森茫たるを恨む。

虎頭 金粟の影、神妙にして独り忘れ難し。

本詩は唐肅宗の乾元元年(七五八)の作である。許八が故郷へ帰る行程を述べる中で、自身が二十年以上も前に江寧で目にした維摩詰図のことを思い出す。観る者をして食を忘れるほど陶醉させ、仏跡の求めがたい悲しみをも感じさせる、奥深く広大な画境。「神妙」ということで称えているのは、そうした顧愷之の卓越した芸術的表現力であり、また描かれた人々の靈妙な力をも含んでいるに違いない。彼は晩年に詠んだ「秋日夔府詠懷奉寄鄭監李賓客一百韻」でも、顧愷之の「維摩詰図」に触れている。

顧愷丹青列、頭陀琬琰鐫。衆香深黯黯、幾地肅芊芊。

勇猛為心極、清羸任体孱。金篋空刮眼、鏡象未離銜。顧愷 丹青列し、頭陀琬琰鐫る。衆香 深くして黯黯たり、幾地か肅として芊芊たる。勇猛 心の極みと為し、清羸体の孱きに任す。金篋空しく眼を刮るも、鏡象未だ銜を離れず。

楊倫の注に「顧画王碑皆想像東遊之事。」(顧の画 王の碑 皆東遊の事を想像す。)とある[5]。杜甫は詩の中で友人に、東に旅したものの定まった居所が無く、寺に宿らねばならないと言う。その際真っ先に頭に浮かんだのが、江寧の顧愷之「維摩詰図」であった。諸家の注が指

摘するように、「勇猛」の一語は『楞嚴經』の「発大勇猛、行諸一切難行法事。」(大勇猛を發し、諸 一切の難行法事を行ふ。)[6]に基づく。前後の流れから、「清羸」の語は「維摩詰図」を観た時の記憶からきているはずなので、この一聯は、体は弱いが心は強いという自身の精神の状態を描写したものである。自身の姿に対するかような認識は、間違いない顧愷之の描いた維摩詰の姿から影響を受けて生まれたものである。「金篋」は仏教思想からの影響を指しているが、もちろん顧愷之の「維摩詰図」からの影響という意味も含んでいる。瓦棺寺の顧愷之「維摩詰壁画」は、後に会昌の廢仏のさなかに失われた。杜詩の題から明らかのように、当時すでに図の写しが出回っていた。そのため原因は失われたものの、別になお模本が存在したことになる。黄元之の碑文の記載と合わせて考えると、敦煌の壁画に残るいくつかの維摩詰図は、顧愷之の絵を模したものと推測できる。これらの絵の構図、色彩及び人物などの多くは、西方の天上界を模しており、異域性や神異性のはつきりと表れている。ゆえに二十年以上経った後も、杜甫はその絵のことをよく覚えていたのである。顧愷之について、杜甫は「題玄武禪師屋壁」詩でも「何年顧虎頭、滿壁画滄洲。赤日石林氣、青天江海流。錫飛常近鷗、杯渡不驚鷗。似得廬山路、真隨惠遠遊。」(何れの年か顧虎頭、滿壁に滄洲を画く。赤日 石林の氣、青天 江海の流れ。錫飛びて常に鶴に近く、杯渡するも鷗を驚かさず。得るに似たり廬

山的路、真に惠遠に随ひて遊ぶを。」と取り上げている。本詩に詠まれているのはおそらく維摩詰像ではなく、一幅の山水画であり、杜甫は顧愷之の風景描写の真に迫った美しさを称えているのだらう。その鑑賞の仕方、は、芸術としてその絵を觀、想像を膨らませるといふものであり、前の二首とは明らかに異なっている。前の二首では、画像に向き合う際、礼拝をするような意識があり、それが当時の人々の一般的な感覚であった。

(三) 王維の画賛と維摩化する人物像の関係
顧愷之の絵の他、盛唐には吳道子(六八〇頃〜七五九)の「維摩詰図」がさらに流行した。彼の絵についての記録は、張彦遠の『歴代名画記』卷三にのみ多く見られる。

(長安薦福寺浄土院) 西廊菩提院吳画維摩詰
(長安安国寺大仏殿) 殿内維摩變吳画

敦煌石窟の中にはなお十数幅の『維摩詰経』を題材とする壁画が残っているが、いずれも吳道子の絵を模したものが、あるいはその影響を受けたものである。これらの画像には、比較的ふつくとした人物の体型、世俗的な要素が増した情景描写、人物に差していた後光の消失といった、唐代の特徴が多く見られる。しかし画家は、なお人物の神異的な部分を際立たせて描こうとする。例えば、維摩詰は常に周囲の人物に比べてやや大きく、布教画の上部には常に飛花があり、人物の座具は西域の籬

ぞ望まん、哀哀たり續経。有漏の法に順ひ、泣血して以て居る。罔極の恩を念へば、性を滅するも報ゆるに非ず。唯だ茲れ十力の護る所なれば、豈に百身の贖に与からんや。纓絡を宝とせず、絵素に資し、極楽の国を図き、無上の樂に象る。法王安詳として、聖衆 圍繞す。湛然として動かず、往来を過ぐるかと疑ふ。寂爾として聞こゆる無く、言説を離るるが若し。林 宝樹を分し、七重にして香城を遶る。衣 天花を捧し、六時 金地に散ず。迦陵 語らんと欲し、曼陀未だ落ちず。衆善 普く会し、諸相 具に美なり。

この文章は開元二十五年、王維が崔希逸の幕府にいた頃の作である。崔氏一族は王維と同じく、仏教への信仰が厚かった。崔氏の娘が仏門に入った時、王維は彼女のために「賛仏文」を作り、崔氏の妻の李氏が父親のために「西方浄土変」を作った時、またこの文を作った。「西方浄土変」は『観無量寿仏経』を藍本としており、西方の極楽世界の光景を描いて、『維摩詰経』仏国品の記載や「浄心浄土」の世界としばしば似通ったところがある。例えば『維摩詰所説経』観衆生品第七では、維摩詰の居室を浄土世界に見立てている。

此室常以金色光照、昼夜無異、不以日月所照為明。是為一未曾有難得之法。此室入者、不為諸垢之所惱也。

幢である。これらは全て現実世界とかけ離れたものである。当時の詩人は同じ題材を扱う際、しばしばこうした絵画の影響を受けた。例えば、王維の「西方變画讚(並序)」に次のようにある。

『西方浄土変』者、左常侍撰御史中丞崔公夫人李氏、奉為亡考故某官中祥之所作也。夫人門為士族之先、道為梵行之首。大師繼踵、望塵而理印。命婦盈朝、聞風而素履。心王自在、万有皆如。頂法真空、一乘不立。以示見故、菩薩為勝鬘夫人。同解脫因、天女讚維摩長者。陟岵何望、哀哀續経。順有漏法、泣血以居。念罔極恩、滅性非報。唯茲十力所護、豈与百身之贖。不宝纓絡、資于絵素、罔極樂国、象無上樂。法王安詳、聖衆圍繞。湛然不動、疑過于往来。寂爾無聞、若離于言説。林分宝樹、七重遶于香城。衣捧天花、六時散于金地。迦陵欲語、曼陀未落。衆善普会、諸相具美。」

『西方浄土変』は、左常侍撰御史中丞崔公夫人李氏、奉じて亡考故某官の中祥を為すの所作なり。夫人は門を士族の先と為し、道を梵行の首と為す。大師踵を継ぎ、塵を望みて印を理す。命婦 朝に盈ち、風ありて素履なるを聞く。心王 自在にして、万有皆如たり。頂法は真空なるも、一乘 立たず。示見の故を以て、菩薩 勝鬘夫人と為る。同に解脫するの因ありて、天女 維摩長者を讚む。岵に陟るも何

是為二未曾有難得之法。此室常有釈梵、四天王、他方菩薩来会不絶。是為三未曾有難得之法。此室常説六波羅蜜不退転法。是為四未曾有難得之法。此室常作天人第一之樂、絃出無量法化之声。是為五未曾有難得之法。此室有四大藏、衆宝積滿、周窮濟乏、求得無尽。是為六未曾有難得之法。此室釈迦牟尼仏、阿彌陀仏、阿闍仏、宝徳、宝炎、宝月、宝嚴、難勝、師子響、一切利成、如是等十方無量諸仏、是上人念時、即皆為来、広説諸仏秘要法蔵、説已還去。是為七未曾有難得之法。此室一切諸天嚴飾宮殿、諸仏浄土、皆於中現。是為八未曾有難得之法。」

此の室常に金色の光を以て照らし、昼夜異なる無く、日月の照らす所を以て明と為さず。是れを一の未曾有難得の法と為す。此の室に入る者、諸垢の悩ます所と為らざるなり。是れを二の未曾有難得の法と為す。此の室常に釈梵、四天王、他方の菩薩の来たり会して絶えざる有り。是れを三の未曾有難得の法と為す。此の室常に六波羅蜜不退転の法を説く。是れを四の未曾有難得の法と為す。此の室常に天人第一の樂を作し、絃より無量法化の声を出だす。是れを五の未曾有難得の法と為す。此の室 四大藏有りて、衆宝積滿し、窮を周ひ乏を濟ひ、求め得ること尽くる無し。是れを六の未曾有難得の法と為す。此の室 釈迦牟尼仏、阿彌陀仏、阿闍仏、宝徳、宝炎、宝月、宝嚴、難勝、師子響、一切利成、是くの如き

等の十方無量の諸仏、是の上人、念ずる時、即ち皆爲に來たりて、広く諸仏の秘要法藏を説き、説き已みて還り去る。是れを七の未曾有難得の法と爲す。此の室、一切の諸天嚴飾の宮殿、諸仏の淨土にして、皆中に於いて現はる。是れを八の未曾有難得の法と爲す。

こうした光景は、敦煌壁画の中にも描かれている¹⁰。王維は『維摩詰經』に精通し、自身もかつて「維摩詰圖」を描いたことがあった¹¹。そのため、しばしば維摩詰の説によって画意を解釈する。例えば「天女 維摩長者を讚む」の一句は、『維摩詰經』觀衆生品第七の「時維摩詰室有一天女、見諸大人、聞所說法、便現其身、即以天華、散諸菩薩、大弟子上。華至諸菩薩、即皆墮落、至大弟子、便著不墮。一切弟子、神力去華、不能令去。」(時に維摩詰の室に一天女有り、諸の大人を見、説く所の法を聞きて、便ち其の身を現はして、即ち天華を以て、諸菩薩、大弟子の上に散ず。華 諸菩薩に至れば、即ち皆墮落し、大弟子に至れば、便ち著きて墮ちず。一切の弟子、神力もて華を去らんとするも、去らしむる能はず。)、¹²「爾時、維摩詰語舍利弗、『是天女曾已供養九十二億仏、已能遊戲菩薩神通、所願具足、得無生忍、住不退轉。以本願故、隨意能現、教化衆生。』」(爾の時、維摩詰舍利弗に語る、「是の天女曾に已に九十二億の仏を供養し、已に能く菩薩の神通に遊戲し、願ふ所具足し、無生忍を得て、不退

転に住まる。本願を以ての故に、意に随ひて能く現じ、衆生を教化す」と。)を踏まえる¹³。「西方淨土図」は『維摩詰經』の教えを広めるための図である。したがって、それに対する賛では当然維摩の淨土が最上の世界とされており、そこには教徒の崇拜の気持ちが表示されている。王維には維摩詰像を主題として詠んだ詩は残っていないが、時に自身を維摩詰になぞらえた表現が見られる。例えば、「与胡居士皆病寄此詩兼示学人二首」其一に次のようにある。

洗心詎懸解、悟道正迷津。因愛果生病、從貪始覺貧。
色声非彼妄、浮幻即吾真。四達竟何遣、万殊安可塵。¹⁴
洗心詎ぞ懸解する、悟道 正に迷津す。愛に因りて
果 病ひを生じ、貪に從りて始めて貧を覺る。色声
彼妄に非ず、浮幻即ち吾真なり。四達竟に何ぞ遣
らん、万殊安くんぞ塵すべけん。

「愛に因りて果 病ひを生ず」は、『維摩詰經』文殊師利問疾品第五の「從痴有愛則我病生。」(痴從り愛有り則ち我が病ひ生ず。)¹⁵に基づく¹⁶。第二首の「詎捨貧病域、不疲生死流。」(詎しくも貧 病の域を捨つれば、生死の流れに疲れず。)¹⁷は、『維摩詰經』文殊師利問疾品第五の「衆魔者樂生死、菩薩於生死而不捨。」(衆魔は生死を樂ひ、菩薩は生死に於いて捨てず。)¹⁸を用いる¹⁹。また「胡居士臥病遺米因贈」詩には次のようにある。

了觀四大因、根性何所有。妄計苟不生、是身孰休咎。
色声何謂客、陰界復誰守。徒言蓮花目、豈惡楊枝肘。
既飽香積飯、不醉声聞酒。有無斷常見、生滅幻夢受。
即病即実相、趨空定狂走。無有一法真、無有一法垢。
居士素通達、随宜善抖擻。牀上無氈臥、鍋中有粥否。
齋時不乞食、定心空漱口。聊持数斗米、且救浮生取。²⁰
四大の因を了觀するに、根性何の有する所かあらん。
妄計苟くも生ぜずんば、是の身孰か休咎あらん。
色 声何ぞ客と謂はん、陰界復た誰か守らん。徒に
言ふ蓮花の目と、豈に悪まん楊枝の肘を。既に香積
の飯に飽き、声聞の酒に酔はず。有無断常見、生
滅幻夢の受。即病即実相、空に趨けば定めて狂走せ
ん。一法の真有る無く、一法の垢有る無し。居士素
より通達し、宜しきに随ひて善く抖擻す。牀上 氈
無くして臥し、鍋中 粥有るや否や。齋時 乞食せ
ざるも、定めて心に空しく口を漱ぐべし。聊か数斗
の米を持ち、且く浮生を救ひて取らん。

『維摩詰經』文殊師利問疾品第五に「四大合故、仮名為身、四大無主、身亦無我。」(四大合するが故に、仮に名づけて身と爲し、四大 主無く、身も亦た我無し。)、²¹「非垢行、非淨行、是菩薩行。」(垢行に非ず、淨行に非ざるは、是れ菩薩の行なり。)²²とある²³ように、両詩には『維摩詰經』の教えが繰り返し引かれている。さらにこれら

を比較すると、胡居士と維摩詰のイメージの類似性が浮かび上がる。その典型的な特徴は、生死や有無の真理を悟っていること、心静かで簡素な生活、病に罹り氣力の無い状態である。王維は胡居士の人物像の「維摩化」を通して、その信仰心の厚さと超俗性を表現しようとした。ただし仏画に贊を書く際、厚い信仰心によって自己の精神を表そうとするだけでは、芸術的情緒はそれ程溢れ出てこない。そのため、当時の維摩詰圖の多くは布教のための品であり、文人の書いた贊も教えを説くという目的のために作られたことが分かる。詩と絵画、教義と詩情はそれぞれまだ一体とはなっていないかった。王維が自らを維摩詰になぞらえることで表現したものの多くは、自身の帰依する仏道と、信仰心である。彩色豊かな維摩詰圖と向き合い呼び起こされたのは宗教的意識だけであり、詩には仏を崇拜する心や敬虔の念しか表現されておらず、世俗化した個人の世界といったものは見出しがたい。以上のように、自らを維摩居士になぞらえるという発想は王維の詩の中にすでに見られるが、いまだ維摩詰像と人物像とが完全に一体とはなっていないかった。それは当時、絵の中に描かれる維摩詰が、なお一尊の仏であり、世俗化した居士ではなかったためである。

二 世俗化の進行…白居易詩に見える自己の「維摩化」

中唐以降、禪宗が大いに興り、維摩詰のイメージは文

人たちの間にますます定着した。多くの文人は大乗仏教の教義を信じるだけでなく、自由に俗と宗教的世界との間を行き来する生活に憧れた。かかる傾向が最も顕著に表れているのが白居易である。中唐以降、彼の影響力の大きさによって、維摩詰とのそうした特殊な繋がりも、後世の文人の詩作に変化をもたらした。

(一) 白居易による維摩詰の人格的偶像化

白居易は常に『維摩詰経』を心の拠り所としており、晩年は特にその傾向が強かった。例えば、太和三年（八二九）に作られた「蘇州重玄寺法華院石壁経碑文」には「証無生忍、造不二門、住不可思議解脱、莫極於『維摩経』」（無生忍を証し、不二の門に造り、不可思議の解脱に住するは、『維摩経』より極まるは莫し。）とある¹⁸。白居易の維摩詰受容の仕方は王維と明らかに異なっている。白居易は維摩居士を自身の生活の理想として見るこゝとが多く、神仏として崇拜する意識はそれ程表さない。また、長慶四年（八二四）に詠まれた「内道場永謹上人就郡見訪、善説『維摩経』、臨別請詩、因以此贈」詩に次のようにある。

五夏登壇内殿師、水為心地玉為儀。正伝金粟如来偈、何用钱塘太守詩。苦海出来応有路、靈山別後可無期。

他生莫忘今朝会、虚白亭中法楽時。¹⁹

五夏の登壇 内殿の師、水を心地と為して玉を儀と為す。正に伝ふ金粟如来の偈、何ぞ用ひん錢塘太守

室有ること摩詰に同じく、児無きこと鄧攸に比す。身在るの日を論ずる莫く、身後 亦た憂ふる無からん。（閑坐）詩、制作年同上）

但要前塵滅、無妨外相同。雖過酒肆上、不離道場中。絃管声非実、花鈿色是空。何人知此義、唯有浄名翁。但だ前塵の滅ずるを要し、外相の同じきに妨げ無し。酒肆の上を過ぐと雖も、道場の中を離れず。絃管声 実には非ず、花鈿 色 はれ空なり。何人か此の義を知らん、唯だ浄名翁有るのみ。（酒筵上答張居士）詩、宝曆二年（八二六）、五十五歳、蘇州刺史の時（の作）

一床方丈向陽開、勞動文殊問疾来。欲界凡夫何足道、四禪天始免風災。

一床の方丈 陽に向きて開き、文殊を勞動して疾を問ひ来たらしむ。欲界の凡夫何ぞ道ふに足らん、四禪天始めて風災を免る。（答閑上人來問因何風疾）詩、太和五年（八三一）、六十歳、河南尹の時（の作）

双刹夾虚空、縁雲一径通。似從切利下、如過劍門中。灯火光初合、笙歌曲未終。可憐師子座、昇出浄名翁。双刹 虚空を夾み、雲に縁りて一径通ず。切利從り下るに似、劍門の中を過ぐるが如し。灯火 光 初めて合し、笙歌 曲 未だ終はらず。憐れむべし師子の座、昇き出だす浄名の翁。（夜従法王寺下帰岳寺）詩、太和六年（八三二）、六十一歳、河南尹の時（の作）

の詩。苦海より出で来たりて応に路有るべく、靈山に別れて後 期無かるべけん。他生 忘るる莫かれ今朝の会、虚白亭中 法楽の時を。

当時白居易は五十三歳、杭州刺史を務めていた。詩題からすると、『維摩詰経』を説いた高僧が彼にもたらしたものは、仏法を会得した後の心地良きであり、単なる宗教的な神聖さではなかった。白居易は詩中でしばしば自らを維摩詰になぞらえているが、その時の維摩詰は、すでに僧侶の信仰する仏から、親しみやすい普通の隠士へと変化している。以下、例を挙げる。

身着居士衣、手把南華篇。終来此山住、永謝区中縁。我今四十余、從此終身閑。若以七十期、猶得三十年。

身に居士の衣を着、手に南華の篇を把る。終に此の山に來たりて住し、永く区中の縁を謝せん。我 今四十余、此從り身を終ふるまで閑ならん。若し七十を以て期せば、猶ほ三十年を得ん。（遊悟真寺詩、元和九年（八一四）、四十三歳、藍田尉の時（の作）

松下軒廊竹下房、暖檐晴日滿繩牀。浄名居士經三卷、榮啓先生琴一張。

松下の軒廊 竹下の房、暖檐の晴日 繩牀に滿つ。浄名居士の經三卷、榮啓先生の琴一張。（東院）詩、長慶二年（八二二）、五十一歳、杭州刺史の時（の作）

有室同摩詰、無兒比鄧攸。莫論身在日、身後亦無憂。

白衣居士紫芝仙、半醉行歌半坐禪。今日維摩兼飲酒、當時綺季不請錢。

白衣居士 紫芝の仙、半ば酔ひて行歌し半ば坐禪す。今日の維摩は兼ねて酒を飲み、当時の綺季は錢を請はず。（自詠）詩、太和七年（八三三）、六十二歳、東都で太子賓客分司の任に就いていた時（の作）

浄名事理人難解、身不出家心出家。浄名の事理 人 解し難く、身は出家せずして心は出家す。（早服雲母散）詩、太和八年（八三四）、六十三歳、東都で太子賓客分司の任に就いていた時（の作）

右眼昏花左足風、金篋石水用無功。不如迴念三乘樂、便得浮生百疾空。無子同居草菴下、有妻偕老道場中。何煩更請僧為侶、月上新婦伴病翁（時適談氏女子自太原初婦。維摩詰有女名月上也。）²⁰。

右眼 昏花たりて左足 風あり、金篋石水 用ふるも功無し。如かず三乗の樂しみを迴念し、便ち浮生百疾の空しきを得るに。子の草菴の下に同居する無きも、妻の道場の中に偕老する有り。何ぞ更に僧に請ひて侶と為すを煩はさん、月上 新たに歸りて病翁に伴ふ（時に談氏に適きし女子 太原自り初めて歸る。維摩詰 女の名 月上といふ有るなり）。（病中看經贈諸道侶）詩、会昌二年（八四二）、七十一歳の時（の作）

十五年来洛下居、道縁俗累尚何如。迷路心迴因向仏、

宦途事了是懸車。全家遞世曾無悶、半俸資身亦有余。
唯是名衛人不会、毘耶長者白尚書。

十五年来、洛下に居り、道縁俗累兩つながら何如。
迷路、心廻りて因りて仏に向かひ、宦途、事了はりて是に車を懸く。全家、世を遞れて曾て悶無く、半俸、身を資けて亦た余り有り。唯だ是れ名衛人、会せず、毘耶長者白尚書。「刑部尚書致仕」詩、制作年同上)

食事、起居、病氣、さらには友人の訪問や嫁いだ娘の帰省といった日常の瑣事から、彼は維摩詰を連想し、またそうした光景が維摩詰のイメージに近いことで、自ら満足した。彼にとつて、維摩詰は単なる仏教における聖人ではなく、まねることのできる俗人であった。例えば元和五年(八一〇)、三十九歳翰林学士であった時の作「和夢遊春詩一百韻序」に次のようにある。

況与足下、外服儒風、内宗梵行者、有日矣。而今而後、非覺路之返也、非空門之帰也、将安反乎、将安帰乎。……叙婚仕之際所以至感者、欲使曲尽其妄、周知其非、然後返乎真、帰乎実。亦猶『法華經』序火宅、偈化城、『維摩經』入姪舍、過酒肆之義也。

況んや足下と、外には儒風を服し、内には梵行を宗とする者、日に有り。而今而後、覺路の返に非ず、空門の帰に非ずんば、將た安くにか反らんや、將た

安くにか帰らんや。……婚仕の際に至りて感ずる所以の者を叙して、曲に其の妄を尽くし、周く其の非を知りて、然る後に真に返り、実に帰せしめんと欲す。亦た猶ほ『法華經』の火宅を序し、化城を偈し、『維摩經』の姪舍に入り、酒肆に過ぎるの義のごとし。

彼は、世俗の生活のあらゆる事柄を取り上げるといふ自身の詩の詠み方と『維摩詰経』とを比較し、「姪舍に入り、酒肆に過ぎる」の一節を取り上げた。この話は『維摩詰所説経』方便品第二に見える。「雖為白衣、奉持沙門清淨律行。雖処居家、不著三界。示有妻子、常修梵行。現有眷属、常樂遠離。雖服宝飾、而以相好嚴身。雖復飲食、而以禪悅為味。若至博奕戲处、輒以度人。受諸異道、不毀正信。雖明世典、常樂佛法。一切見敬、為供養中最、執持正法、撰諸長幼。一切治生諸偶、雖獲俗利、不以喜悅。遊諸四衢、饒益衆生、入治正法、救護一切。入講論处、導以大乘、入諸学堂、誘開童蒙。入諸姪舍、示欲之過、入諸酒肆、能立其志。」(白衣為りと雖も、沙門清淨の律行を奉持す。居家に処ると雖も、三界に著せず。妻子有るを示すも、常に梵行を修む。眷属有るを現ずるも、常に遠離を樂ふ。宝飾を服すと雖も、相好を以て身を嚴かにす。復た飲食すと雖も、禪悅を以て味と為す。若し博奕の戲処に至らば、輒ち以て人を度す。諸の異道を受くるも、正信を毀らず。世典を明らかにすと雖も、

常に仏法を樂ふ。一切に敬せられて、供養中の最と為り、正法を執持して、諸の長幼を撰す。一切の治生諸偶、俗利を獲と雖も、以て喜悅せず。諸の四衢に遊びて、衆生を饒益し、治正の法に入りて、一切を救護す。講論する処に入りて、導くに大乘を以てし、諸の学堂に入りて、童蒙を誘開す。諸の姪舍に入りて、欲の過ちを示し、諸の酒肆に入りて、能く其の志を立つ。)(21)鳩摩羅什、僧肇はこれに「什曰、外国有一女人、身体金色。有長者子名達暮多羅、以千両金要入竹林、同載而去。文殊師利於中道变身為白衣。身著宝衣、衣甚嚴好、女人見之貪心内発。文殊言、『汝欲得衣者、当発菩提心。』」女曰、『何等為菩提心。』」答曰、『汝身是也。』」問曰、『云何是。』」答曰、『菩提性空、汝身亦空。』」以此故是。此女曾於迦葉仏所宿殖善本、修智慧、聞是説即得無生法忍。得無生法忍已將示欲之過。還与長者子入竹林、入林中已自現身死腫脹臭爛。長者子見已甚大怖畏、往詣仏所、仏為説法亦得法忍。示欲之過有如是利益也。肇曰、外国姪人別立聚落。凡予士之流目不暫顧。而大士同其欲、然後示其過也。」(什曰く、外国に一女人有り、身体、金色なり。長者の子、名は達暮多羅なる有り、千両の金を以て竹林に入らんことを要め、同に載りて去る。文殊師利、中道に於いて身を変へて白衣と為る。身、宝衣を著、衣、甚だ嚴好なれば、女人之を見て貪心、内に発こる。文殊言ふ、「汝衣を得んと欲するは、当に菩提の心を發こすべし」と。女曰く、「何等を菩提の心と為すか」と。答へて曰く、「汝

の身、是れなり」と。問ひて曰く、「何をか是れと云ふ」と。答へて曰く、「菩提の性空にして、汝の身も亦た空なるなり」と。此の故を以て是れなり。此の女曾て迦葉仏の宿る所に於いて善本を殖し、智慧を修め、是の説を聞きて即ち無生法忍を得。無生法忍を得て已に將に欲の過ちを示さんとす。還た長者の子と竹林に入り、林中に入りて已に自らの現身、死して腫脹臭爛す。長者の子見て已に甚だ大いに怖畏し、往きて仏の所に詣り、仏為に説法して亦た法忍を得しむ。欲の過ちを示すことは是くの如き利益有るなり。肇曰く、外国の姪人、別に聚落を立つ。凡そ予士の流目するも暫く顧みず。而るに大士其の欲を同じくして、然る後に其の過ちを示すなり。)と注する。(22)。同書仏道品第八でも、欲と座禪の理が説かれる。「示受於五欲、亦復現行禪。令魔心憤乱、不能得其便。火中生蓮華、是可謂稀有。在欲而行禪、希有亦如是。或現作姪女、引諸好色者。先以欲鉤牽、後令入仏智。」(五欲を受くるを示し、亦た復た禪を行ふを現す。魔心をして憤乱するに、其の便を得る能はざらしむ。火中に蓮華を生ずるは、是れ稀有と謂ふべし。欲に在りて禪を行ふも、希有なること亦た是くの如し。或いは現じて姪女と作り、諸の好色の者を引く。先づ欲の鉤を以て牽き、後に仏智に入らしむ。)(23)白居易の言はおそらくこれらに基づくと思われる。彼は『維摩詰経』によつて、些末で俗な事柄を取り上げるといふ自身の詩の詠み方に対して価値付けを行い、同時にそうした日常の瑣事と『維摩

詰経」との共通性や類似性によって自らを慰め、また満足した。

(二) 白居易による自己の維摩化

白居易はいくつかの閑適詩において自身を維摩詰になぞらえているが、多くは自身の姿を描写する際に、そうした表現をしている。彼は自身の外見の変化を大変気にし、肖像や鏡に映った姿を多く詩に詠んだ^[24]。そうした詩では、容貌の衰えに対する悲しみが主な内容となっており、晩年の作品にはしばしば「反悲老」の調子が見られる。関連する作品を見ると、彼は自身を維摩詰になぞらせることで、自らを慰めていることが分かる。例えば、四十三歳の時に詠んだ「遊悟貞寺詩」には「身に居士の衣を着、手に南華の篇を把る。」とある。はじめは居士として自らを描いているが、同時に道教の経典も読んでおり、そのイメージには仏教と道教の二つが含まれている。さらに、五十一歳の時に作った「東院」詩では「浄名居士の經三卷、榮啓先生の琴一張。」と詠んでおり、その十数年後、六十四歳の時に作った「覽鏡喜老」詩では「古人亦有言、浮生七十稀。我今欠六歲、多幸或庶幾。儻得及此限、何羨榮啓期。」(古人も亦た言ふ有り、浮生七十稀なりと。我今六歳を欠き、多幸或いは庶幾からん。儻し此の限りに及ぶを得ば、何ぞ榮啓期を羨まん。)とうたっている^[25]。榮啓期の長寿をも羨むに値しないと書っていることから、もう一方の浄名居士(維摩居士)が、一番の心の慰めとなっていたことが分かる。かくの

のを見つけ、常に優越感に浸っていた。特に自己を維摩詰になぞらえ、自らを慰めることが、そうした心の状態を作る大きな要素となっていた。自題詩にしばしば表現されているように、内は維摩詰の大乗の教義を心の支えとし、外は生活や自身の姿を維摩詰に似せた。例えば、晩年(會昌二年七十二歳頃)の作である「不出門」詩では、病中の生活を次のようにうたっている。

弥月不出門、永日無來賓。食飽更扃床、睡覺一嘔伸。
輕篋白鳥羽、新篋青箭筠。方寸方丈室、空然兩無塵。
披衣腰不帶、散髮頭不巾。祖跣北窓下、葛天之遺民。
一日亦自足、況得以終身。不知天壤內、自我為何人。
月を弥りて門を出でず、永日 來賓無し。食飽きて更に床を扃ひ、睡り覚めて一たび嘔伸す。輕篋白鳥の羽、新篋青箭の筠。方寸方丈の室、空然として両つながら塵無し。衣を披て腰帯びず、髪を散じて頭巾せず。祖跣北窓の下、葛天の遺民なり。一日亦た自ら足る、況や以て身を終ふるを得るをや。知らず天壤の内、我を目して何人と為すかを。

手には羽扇を持ち、身を竹の蓆に横たえ、庵室に籠もり、衣を羽織り、ざんばら髪で裸足といった姿の、簡素で静かな生活に身を置くことで、白居易は大変満足感を得ていた。そして、そうした満足感、彼が自らを維摩詰になぞらせることからきていた。以上の内容をまとめると、

ごとく、晩年になるにつれて、彼の描く自己の姿は次第に居士へと固まっていた。

白居易の閑適詩は、陶淵明の特徴を多く取り入れているが、自身の身体や、年齢に伴う病に対する関心は陶淵明よりも強い。彼は四十歳頃から詩に病を詠み始め、晩年に至るまで毎年そうした詩を作った。また、身体の変化に注意を払うだけでなく、病んだ身体を生活の一部として捉えることで満足した。彼は若い頃から病身の僧の姿を美しいと感じていた。例えば貞元十六年(八〇〇)、二十九歳の時に詠んだ「旅次景空寺宿幽上人院」詩に次のようにある。

不与人境接、寺門開向山。暮鐘鳴鳥聚、秋雨病僧閑。
月隱雲樹外、螢飛廊宇間。幸投花界宿、暫得靜心顏。^[26]
人境と接せず、寺門開きて山に向かふ。暮鐘 鳴鳥 聚まり、秋雨 病僧閑かなり。月 雲樹の外に隠れ、螢 廊宇の間に飛ぶ。幸ひに花界に投じて宿し、暫く心顔を静むるを得たり。

病身の僧やひっそりとした寺、晩鐘、高い木々が一体となって趣のある詩の世界を作り出している。白居易は鑑賞者の目で病身の僧を見ており、また同じ態度で自身の病んだ身体に向き合っている。これは間違いなく維摩詰の姿から影響を受けたものである。晩年の白居易は心が穏やかであり、生活の中からうまく自分を満足させるも

人物の身なりや姿、表情から情景に至るまで、全てが當時出回っていた「維摩詰示疾図」に基づいていることが分かる。特に表中の「故紗絳帳旧青氈」、「鶏膚鶴髪復た何ぞ傷まん」、「老翁 塵尾を持ち、坐して半張の牀を払う」といった表現は、より直接的に「維摩詰図」から取り入れたものである。このように、白居易は様々な「維摩詰変相図」の要素を用いて自己の姿を作り上げ、自身の「維摩詰化」を成し遂げた。

白居易のかかる行為は、決して偶然なされたものではない。当時の詩人たちはしばしば自らを維摩詰になぞらえており、人によっては生活も維摩詰をまねていた。それは例えば次のようである。

古樹少枝葉、真僧亦相依。山木自由直、道人無是非。
手持維摩偈、心向居士帰。空景忽開霽、雪花猶在衣。
洗然水溪昼、寒物生光輝。^[27]
古樹 枝葉少なく、真僧亦た相ひ依る。山木 自ら曲直し、道人 是非無し。手に持つ維摩の偈を、心は向く居士の帰るに。空景忽ち霽を開き、雪花猶ほ衣に在り。洗然たり水溪の昼、寒物 光輝を生ず。

(孟郊「聽藍溪僧為元居士說維摩經」詩)

維摩青石講初休、緣訪親宗到普州。我有軍持憑弟子、岳陽溪裏汲寒流。

維摩 青石に講 初めて休み、親宗を緣訪して普州に到る。我 軍持有りて弟子に憑り、岳陽溪裏に寒

流を汲ましむ。(賈島「訪鑑玄師姪」詩)

右の二首はいずれも僧侶を維摩詰になぞらえているが、情景には違いがある。一首目では雪を天花に喩えており、二首目では維摩詰図の中の机を黒い石に変えている。これはあるいは、当時広く伝わっていた維摩詰図から取り入れたものかもしれない。また次のような例もある。

知訪寒梅過野塘、久留金勒為迴腸。謝郎衣袖初翻雪、
荀令熏炉更換香。何処拈胸資蝶粉、幾時塗額藉蜂黃。
維摩一室雖多病、亦要天花作道場。

知る訪れし寒梅 野塘を過ぎ、久しく金勒を留めて
迴腸を為すを。謝郎の衣袖初めて雪を翻し、荀令の
熏炉 更に香を換ふ。何れの処か胸を払ふに蝶粉を
資し、幾の時か額を塗るに蜂黄を藉りん。維摩の一
室 病多しと雖も、亦た天花を要めて道場と作さん。
(李商隱「酬崔八早梅有贈兼示之作」詩)

維摩居士陶居士、尽說高情未足誇。檐外蓮峰階下菊、
碧蓮黃菊是吾家。

維摩居士 陶居士、尽く高情を説くも未だ誇るに足
らず。檐外の蓮峰 階下の菊、碧蓮黃菊 是れ吾が
家なり。(司空圖「雨中」詩)

一首目では梅の花を天花とし、また自分が維摩詰のよう
に多くの病を抱えて独りで部屋に居るとうたう。二首目

りて六十字を題して以て懐ふ所を写す。

昔作少学士、凶形入集賢。今為老居士、写貌寄香山。
鶴毳變玄髮、鷄膚換朱顏。前形与後貌、相去三十年。

勿歎韶華子、俄成皤叟仙。請看東海水、亦變作桑田。
[28] 昔 少学士と作り、形を凶にして集賢に入る。今
老居士と為り、貌を写して香山に寄す。鶴毳玄
髮変じ、鷄膚 朱顔換はる。前形と後貌と、相ひ
去ること三十年。歎ずる勿かれ韶華の子、俄かに
皤叟の仙と成るを。請ふ看よ東海の水、亦た変じ
て桑田と作るを。

自ら香山居士と名乗った白居易は、「鶴髮」、「鷄膚」と
いった老いた身体の特徴に目を向けている。この「香山
居士写真圖」が彼の肖像画で、またその詩が「題詠」に
近いことがよく分かる。画家は白居易が作り上げた老居
士の姿を描いたが、そうした姿は当時の一般的な維摩詰
のイメージと間違いなく関係があるう。それは詩人が「維
摩詰図」に基づき自らを詩に詠じた結果なのである。

白居易はこの肖像画を大変好み、香山寺の藏経閣の中
に収めただけでなく、廬山の東林寺にも送って保存した。
宋初の陳舜俞(一〇二六―一〇七六)『廬山記』巻二に次
のように記されている。

昔公之遊東林也、睹經藏中有遠公諸文士倡和集。時諸

では、秋の菊という隱者を連想させる伝統的な事物を取
り上げつつ、維摩詰と陶淵明を結び付け、両者を一体化
している。こうした発想は、白居易の関連する詩に非常
によく似ている。

(三)「香山居士圖」と「維摩詰図」

白居易の当時の肖像画は残っておらず、後世に伝わっ
たものの多くは、宋以後の「香山居士圖」の模本である。
それらは、白居易が晩年に作り上げた自己の姿を描いた
ものである。そこには、白居易の詩に見られる維摩詰化
した姿がはつきりと描かれており、また維摩詰化した詩
情も表現されている。

白居易の「香山居士写真詩并序」に次のようにある。

元和五年、予為左拾遺、翰林学士、奉詔写真於集賢
殿御書院。時年三十七。會昌二年(八四二)、罷太子
少傅為白衣居士、又写真於香山寺藏經堂。時年七十
一。前後相望殆將三紀。觀今照昔、慨然自歎者久之。

形容非一、世事幾變。因題六十字以写所懷。

元和五年、予 左拾遺、翰林学士と為り、詔を奉
じて真を集賢殿の御書院に写す。時に年三十七。
會昌二年、太子少傅を罷めて白衣居士と為り、又
た真を香山寺の藏經堂に写す。時に年七十一。前
後相ひ望むに殆ど將に三紀ならんとす。今を觀
昔を照らし、慨然として自ら歎ずること之を久し
くす。形容 一に非ず、世事幾たびか變ずる。因

長老亦請公文集同藏之。至太和九年為太子賓客、始以
文集六十卷歸之。會昌中致仕、復送後集十卷及香山居
士之像。広明中、与遠公『匡山集』並為淮南高駢所毀。
吳太和六年、德化王澈嘗抄贍以補其欠、復亡失。今所
藏美景德四年詔史館書授而賜者。[29]

昔 公の東林に遊ぶや、經藏の中に遠公諸文士の倡
和集有るを睹る。時に諸長老亦た公の文集を請ひて
同に之を藏せんとす。太和九年 太子賓客と為るに
至り、始めて文集六十卷を以て之を歸る。會昌中
致仕し、復た後集十卷及び香山居士の像を送る。広
明中、遠公の『匡山集』と並びに淮南の高駢の毀つ
所と為る。吳の太和六年、德化王澈 嘗て抄贍して
以て其の欠けたるを補ふも、復た亡失す。今の藏す
る所は実に景德四年 詔ありて史館をして書し授け
しめて賜ひし者なり。

この他、洛陽の自宅にも肖像画は残されていた。宋庠
(九九六―一〇六六)『元憲集』巻五「過普明禪院(唐太
子少傅白公旧宅)二首」に次のようにうたわれている。

自昔仁為里、于今福作田。清風殘竹地、宝色故池天。
繪象成真侶(樂天旧影与蒲禪師偶立)、家声入梵縁(又
常自称香山居士)。一披龍藏集、無復歎亡篇(後唐明
宗子秦王尹京曰、「特写公文集一本、置經中。」至今集
本最善)。[30]

昔より仁 里を為め、今に于いて福 田と作る。清風 残竹の地、宝色 故池の天。絵象 真侶と成り（樂天の旧影 蒲禪師と偶立す。）、家声 梵縁に入る（又た常に自ら香山居士と称す。）。一たび龍藏の集を披けば、復た亡篇を歎ずる無し（後唐の明宗の子 秦王尹京曰く、「特に公の文集一本を写し、経中に置き」と。今に至るまで集本の最も善なるものなり。）。

ここに言う白居易の旧宅は、もちろん香山寺ではなく、洛陽城中の履道坊にあったものである^[31]。肖像画は「九老図」とともに並べられていた。「九老図」に関しては、白居易「七老会詩並序」に次のように記されている。

胡、吉、鄭、劉、盧、張等六賢皆多年寿、予亦次焉。偶於弊居合、成尚齒之会。七老相顧、既醉甚歡。靜而思之、此会稀有。因成七言六韻以紀之、伝好事者。会昌五年三月二十一日、於白家履道宅同宴、宴罷賦時。時秘書監狄兼謨、河南尹盧貞以年未七十、雖与会而不及列。

胡、吉、鄭、劉、盧、張等六賢 皆年寿多く、予も亦た次ぐ。偶 弊居に於いて合ひ、尚齒の会を成す。七老相顧み、既に酔ひて甚だ歡ぶ。静まりて之を思ふ、此の会有ること稀なりと。因りて七言六韻を成して以て之を紀し、好事者に伝ふ。

老図」、仍以一絶贈之（自注…二老謂洛中遺老李元爽年一百三十六、帰洛僧如滿年九十五。）。

「九老図詩并びに序」…会昌五年三月、胡、吉、劉、鄭、盧、張等六賢、東都の敝居履道坊に於いて尚齒の会に合ふ。其の年の夏又た二老有り、年貌絶倫にして、同じく故郷に帰り、亦た斯の会に来たり。續ぎて命じて姓名年齒を書し、其の形貌を写し、図右に附せしめ、前の七名と題して「九老図」と為し、仍りて一絶を以て之に贈る（自注…二老は洛中の遺老李元爽 年一百三十六、帰洛の僧如滿年九十五を謂ふ。）。

雪作鬢眉雲作衣、遼東華表鶴双帰。当時一鶴猶稀有、何況今逢兩令威。^[33]
雪 鬢眉と作りて雲 衣と作り、遼東の華表 鶴 双び帰る。当時一鶴猶ほ有ること稀なり、何ぞ況んや今 兩令威に逢ふをや。

現存する「香山九老図」は、宋人が「香山居士図」の中の白居易の姿を取り入れて新たに作ったものである。白居易は楽しい表情や老いた身体を描くことに力を入れて題画詩を作り、二百年後、宋庠はその中に維摩詰の姿を見た。

「香山九老図」では、白居易の姿は立ったものから座ったものになり、基本的な部分は固定化された。机に寄りかかって座る姿や老いて瘦せた身体、下女が側に仕

会昌五年三月二十一日、白家履道の宅に於いて同じく宴し、宴罷みて時を賦す。時に秘書監狄兼謨、河南尹盧貞 年未だ七十ならざるを以て、会に与かるると雖も列するに及ばず。

「刑部尚書致仕太原白居易（年七十四）…七人五百八十四（今本作七人五百七十歳）、扞紫紆朱垂白鬢。手裏無金莫嗟嘆、樽中有酒且歡娛。詩吟兩句神還王、飲到三杯氣尚粗。鬼峨狂歌教婢拍、婆娑醉舞遣孫扶。天年高過二疏傳、人數多於四皓図。除却三山五天竺（三仙山、五天竺図、多老寿者）、人間此会更応無。

[32]

「刑部尚書致仕太原白居易（年七十四）…七人五百八十四（今本 七人五百七十歳に作る）、紫を扞き朱を紆して白鬢垂る。手裏 金無きも嗟嘆する莫く、樽中 酒有り且つ歡娛す。詩 兩句を吟じて神 還た王に、飲みて三杯に到りて気尚ほ粗なり。鬼峨たる狂歌 婢をして拍たしめ、婆娑たる醉舞 孫をして扶けしむ。天年高きこと二疏傳に過ぎ、人數 四皓の図より多し。三山五天竺を除却し（三仙山、五天竺図、老寿の者多し）、人間此の会 更に応に無かるべし。

「九老図詩并序」…会昌五年三月、胡、吉、劉、鄭、盧、張等六賢、於東都敝居履道坊合尚齒之会。其年夏又有二老、年貌絶倫、同帰故郷、亦来斯会。續命書姓名年齒、写其形貌、附於図右、与前七名題為「九

え、小さな部屋に居るといった特徴は、それ以前に流行した「維摩詰図」の特徴によく似ている。画家が詩の中から維摩化した彼の姿を取り入れたことで、「維摩詰図」の情景や構図、人物の特徴などが白居易像の中に見られるようになった。維摩詰の要素を含んだ香山居士の画像は、白居易が自らを維摩詰になぞらえた数多くの詩の詩情を表現するものである。

かかる現象は白居易にのみ見られるものではなく、当時の一般的な芸術的傾向であった。晩唐・貫休の「羅漢図」は、その証拠として挙げられる。詩僧であり、また画僧でもある貫休は、維摩詰の芸術的イメージや、維摩詰の姿を世俗化させるといふ当時の文人の思考を非常によく理解していた。彼は「大蜀高祖潜龍日猷陳情偈頌」で維摩詰を周公とともに並べ、蜀主と称えている。「聞蜀風景、地寧得一。富人侯王、且爽摩詰。龍角日角、紫氣盤屈。」（聞く蜀の風景、地寧くして一を得と。富人侯王、且爽摩詰。龍角日角、紫氣 盤屈す。）^[34]また「冬末病旦爽摩詰。龍角日角、紫氣 盤屈す。」^[35]また「冬末病中作二首」其の一には「冬風吹草木、亦吹我病根。故人久不来、冷落如丘園。聃龍与摩詰、吁歎非不聞。顧惟年少時、未合多憂歎。風鍾遠孤枕、雪水流凍痕。空余微妙心、期空靜者論。」（冬風 草木を吹き、亦た我が病根を吹く。故人久しく来ず、冷落なること丘園の如し。聃龍と摩詰と、吁歎聞かざるに非ず。顧みるに惟れ年少の時、未だ合に憂歎多かるべからず。風鍾 孤枕に遠く、雪水凍痕に流る。空余微妙の心、靜者の論に空ならんことを

期す。)とある。ここでもまた自らを維摩詰になぞらえており、彼が作った「羅漢図」が構図、人物の特徴、情景などの多くの部分で維摩詰像を模していたことが分かる。西域の高僧の彫りの深い顔以外では、表情や動作によって僧の趣を出しており、同時に人物の服装や背景によってその世俗化を表現している。蜀の翰林学士であった欧陽炯の「貫休応夢羅漢画歌」は、この絵について詠んだものである。

形如瘦鶴精神健、頂似伏犀頭骨巖。……唐朝歴歴多名士、蕭子雲兼吳道子。若將書画比休公、只恐當時浪生死。……詩名画手皆奇絶、觀爾凡人争是人。瓦棺寺裏維摩詰、舍衛城中辟支仏。若將此画比量看、総在人間為第一。

形は瘦鶴の如きも精神健やかに、頂は伏犀に似て頭骨巖なり。……唐朝歴歴として名士多く、蕭子雲兼吳道子。若し書画を將て休公に比ぶれば、只だ恐る當時の生死を浪にせんことを。……詩名画手皆奇絶なれば、爾の凡人なるを觀ひて争でか是の人ならん。瓦棺寺の裏の維摩詰、舍衛城中の辟支仏。若し此の画を將て比量して看れば、総べて人間に在りて第一為らん。

欧陽炯が顧愷之の「維摩詰図」を貫休の「羅漢図」と比較したところ、両者にははっきりと芸術上の類似した点

が認められた。各図の構図や人物の動作、表情、周囲の物等を見ると、それらは『維摩詰経』の中の維摩詰に近いと分かる。欧陽炯は、「羅漢図」と顧愷之「維摩詰図」には共通する芸術的要素があると言っている。欧陽炯の詩は画賛であるが、また特殊な題詠詩のようでもある。貫休と欧陽炯が示した詩と絵の関係は、これらが後により一層強く結び付く先駆けとなった。『宣和画譜』卷三には貫休の「維摩像一幅」が記録されており、貫休は自らの作品を「樂天、長吉似之矣」(樂天、長吉之に似たり)と述べている³⁵⁾ことから、彼も白居易の詩風を継いでいることが分かる。人物の「維摩化」という表現は、おそらく白居易の詩の手法を取り入れたものである。さらに指摘しておかなければならないのは、維摩詰の姿の中国人化は、仏教受容の歴史の一つの流れだということである。唐代以前には傅大士がおり、白居易の時代には龐居士がいた。白居易の詩や後世の絵はそうした歴史の流れの一つの具体的な表れに過ぎない。廟や洞窟、厨子、壁画に見られる維摩詰は、すでに祭壇を降りて文人たちの世俗の世界に溶け込み、親しみやすい生活の理想像となりつつあったのである。

※紙幅の関係により、本稿では唐代に関する部分のみを訳出した。宋代に関する部分については、稿を改めて掲載する。

注

- [1] 金維諾「顧愷之的芸術成就」(『文物參考資料』六、一九五八)二〇頁に「顧愷之の宗教画は残っていないが、河西一帶の石窟の壁画と文献の記載とを結び付けることで、ある程度彼らのような美術家に代表される六朝時代の仏教美術の水準を知ることができる。」とある。その他、鄒清泉「莫高窟唐代坐帳維摩画像考論」(『敦煌研究』一、二〇〇一)三三〜三九頁、肖建軍「維摩詰圖像創造及其圖像來源之分析」(『文芸争鳴』六、二〇一一)一四六〜一四九頁も参照されたい。
- [2] 『全唐文』(清・董誥等編、北京、中華書局、一九八三)卷二六六、二七〇〇頁。
- [3] 『杜詩詳注』(唐・杜甫著、清・仇兆鼉注、北京、中華書局、一九七九)卷六、四五七頁。
- [4] 『杜詩詳注』卷一九、一七一五頁。
- [5] 『杜詩鏡銓』(清・楊倫撰、上海、上海古籍出版社、一九八〇)卷一六、八〇七頁。
- [6] 『杜詩詳注』卷一九、一七二六頁。
- [7] 『杜詩詳注』卷一一、九二九〜九三〇頁。
- [8] 『王維集校注』(唐・王維著、陳鉄民校注、中華書局、一九九七)卷八、七三八〜七三九頁。
- [9] 『注維摩詰経』(後秦・釈僧肇撰)卷六、CBETA、T38、No. 1775、P. 0389、a10、13、20、b01、06。
- [10] 納一「仏教美術中的維摩詰題材釈読」(『故宮博物院院刊』四、二〇〇四)六〜一一〇頁参照。
- [11] 『宣和画譜』卷十に王維「『維摩詰図』二」の記載がある。
- [12] 『注維摩詰経』卷六、CBETA、T38、No. 1775、P. 0386、c27、P. 0387、a03、13、14、18、P. 0390、b08。
- [13] 『王維集校注』卷六、五三二頁。
- [14] 『注維摩詰経』卷五、CBETA、T38、No. 1775、P. 0371、c28。
- [15] 同上、CBETA、T38、No. 1775、P. 0374、a03。
- [16] 『王維集校注』卷六、五二八頁。
- [17] 『注維摩詰経』卷五、CBETA、T38、No. 1775、P. 0376、a13、P. 0380、a09。
- [18] 『白居易集箋校』(唐・白居易著、朱金城箋校、上海、上海古籍出版社、一九八八)卷六九、三七〇二頁には、太和三年(八二九)の作、白居易五十八歳、東都洛陽で太子賓客分司の任に就いていたとある。
- [19] 『白居易集箋校』卷二〇、一三八六頁。以下に引く諸詩はそれぞれ、卷六、三四二頁、卷二〇、一三三五頁、卷一九、一三二一頁、卷二四、一六九二頁、卷三五、一三八八頁、卷二七、一九一五頁、卷三一、二二三〇頁、卷三一、二一六一頁、卷三六、二五二八頁、卷三七、二五四六頁、卷一四、八六四頁に見える。
- [20] 月上女について、『仏説月上女経』卷上に「爾時、彼城有離車、名毘摩羅詰、其家巨富資財無量、倉庫豐盈不可称数、四足二足諸畜生等悉皆充溢。其人有一妻名曰無垢、可喜端正形

貌、殊美女相具足。然彼婦人於時懷妊、滿足九月、便生一女姿容端正。……其身自然著諸天服、妙宝、衣裳、於其身上出妙光、明勝於月照、猶如金色耀其家内。然其父母見彼光故、即為立名称為月上。(爾の時、彼の城に離車有り、名は毘摩羅詰、其の家 巨富資財 無量にして、倉庫 豊盈して称数すべからず、四足二足の諸畜生等 悉く皆充溢す。其の人妻有り名を無垢と曰ひ、喜ぶべき端正なる形貌、殊美の女相具足す。然して彼の婦人 時に於いて懷妊し、九月を満足して、便ち一女の姿容端正なるを生む。……其の身 自然に諸天の服、妙宝、衣裳を著、其の身上に於いて妙光を出だし、明るきこと月照に勝り、猶ほ金色の其の家内に耀くが如し。然して其の父母 彼の光を見し故に、即ち為に立名し称して月上と為す。)とある。また『維摩詰経』入不二法門品第九の中に一箇所、「月上菩薩曰、『闇与明為二。無闇無明即無有二。所以者何。如入滅受想定、無闇無明、一切法相亦復如是。於其中平等入者、是為入不二法門。』(月上菩薩曰く、「闇と明とを二と為す。闇無く明無くんば即ち二有る無し。所以の者は何ぞ。滅受想定に入れば、闇無く明無きが如く、一切法相も亦た復た是くの如し。其の中に於いて平等にして入る者、是れを不二の法門に入ると為す」と。))と見える。ここで白居易は、談氏に嫁いだ娘を維摩詰の娘月上になぞらえている。

[21] 『注維摩詰経』卷二、CBETA、T38、No. 1775、P. 0339、b24~0340、a24。

[22] 同上、P. 0340、a09。

求『河南志』、李格非『洛陽名園記』に見ゆ。)とある。

[32] 『白居易集箋校』卷三七、二五六三~二五六四頁。

[33] 『白居易集箋校』外集卷上、三八六一頁。本詩は白居易の本集中には見えず、彼が自身の文集を編纂した後に作られたものである。『新唐書』白居易伝等から、ここに書かれていることは事実だと分かる。「九老図」は当時広く伝わっていた。「仍りて一絶を以て之に贈る」の記述からすると、図には詩が附されていたようである。白居易は皆のためにそれぞれ一絶句を作ったのである。

[34] 『全唐詩』卷八二八、九三二六頁。以下の二首はそれぞれ卷八二七、九三一六~九三二七頁、卷七六一、八六三八~八六三九頁に見える。

[35] 『禅月集』(貫休著、文淵閣四庫全書本) 後序。

※本稿は校正及び絵画の分析において李由、蒙頭鵬両氏の助力を仰いだ。特に感謝申し上げる。

[23] 『注維摩詰経』卷七、CBETA、T38、No. 1775、P. 0396、a16~22。

[24] 衣若芬「自我的凝視——白居易的写真詩与对鏡詩」(芸林探微)、衣若芬著、華東師範大学出版社、二〇一二、一(二〇頁)。

[25] 『白居易集箋校』卷三〇、二〇五八頁。

[26] 『白居易集箋校』卷一三、七七二~七七二頁。次に引く詩は卷三六、二四九三頁に見える。

[27] 『全唐詩』(中華書局、一九六〇) 卷三八〇、四二六六頁。以下の三首はそれぞれ同書の卷五七四、六六八頁、卷五三九、六一七五頁、卷六三三、七二六二頁に見える。

[28] 『白居易集箋校』卷三六、二四九〇頁。

[29] 『廬山記』(宋・陳舜俞著、文淵閣四庫全書本) 卷二。また、CBETA、T51、No. 2095も参照。

[30] 『元憲集』(宋・宋庠著、文淵閣四庫全書本) 卷五。

[31] 陳振孫「白居易年譜」(『白香山詩集』「年譜旧本」、文淵閣四庫全書本) に「長慶四年」始卜居履道坊、得故散騎常侍楊憑宅。……至後唐為普明禪院、有秦王從榮所施大字經藏及写公集寶藏中。洛人但曰大字寺。其園張氏得其半、為會隱園。水竹尚在、寺中有公石刻甚多。見宋敏求『河南志』、李格非『洛陽名園記』。(始めて履道坊に卜居し、故散騎常侍楊憑の宅を得。……後唐に至りて普明禪院と為り、秦王從榮の施す所の大字の經藏及び公の集を写して藏中に實く有り。洛人但だ大字寺と曰ふ。其の園 張氏其の半ばを得、會隱園と為す。水竹尚ほ在り、寺中に公の石刻甚だ多き有り。宋敏